

類義語分析ストラテジーのトレーニングに見られた 正用例文分析行動の特徴

Features of Analysis for Grammatical Example Sentences

Observed in the Training of Synonym Analysis Strategy

坂口和寛・河野俊之

SAKAGUCHI Kazuhiro・KAWANO Toshiyuki

信州大学人文学部・横浜国立大学教育人間科学部

Shinshu University・Yokohama National University

〒390-8621 松本市旭 3-1-1・〒240-8501 横浜市保土ヶ谷区常盤台 79-2

sakgchi@shinshu-u.ac.jp・tkawano@ynu.ac.jp

Abstract : We are currently making improvements in a self-learning textbook of synonym analysis strategy. The textbook is composed of explanations and practice for the strategy. In order to enrich the strategy of analyzing grammatical example sentences, we took up "imaging strategy," — verbalizing the image recalled from the sentences — and examined whether its training is effective in a Japanese teacher training program. The result showed that the trainees explained the content of sentences superficially and peripheral events which has not been shown to the sentences. Thus, in order to obtain information efficiently from examples for synonym analysis, detailed checking and reanalysis of the verbalized image is needed.

キーワード : 類義語分析、例文分析、正用文、映像化ストラテジー、ストラテジートレーニング

1. はじめに

外国人日本語学習者への語彙指導において類義語は重要な位置を占める。類義語の使い分けの把握には文法性の異なる例文ペアの作成と比較分析が不可欠である。特に非文分析は、文法性に問題が生じる原因を探るために広範で高度な言語知識やメタ言語能力を要する。一方、正用文は作成が容易で、例文分析も非文と比べ特殊性が低い。よって類義語分析に不慣れな日本語教師や養成課程の初学者には、正用文対象の例文分析技術の向上が重要といえる。

本研究は、正用文から類義語分析に資する情報を得る手続きとして「映像化ストラテジー」を設定しトレーニングを実施する。そして、日本語母語話者が行った例文分析の特徴と問題点を把握し、映像化ストラテジーによる例文分析を意識化し習熟を促すことの有用性を探る。

2. 映像化ストラテジー

「映像化ストラテジー」は、正用例文から想起する映像やイメージを言語化し、例文の表す事象や場面、人物の心情や置かれた状況を明らかにして例文内容を具体的かつ詳細に把握する、例文分析の手続きである(坂口 2009)。例文映像の言語化から、類義語の特徴発見に資する情報を得ることを目指す。以下は「ねっしん／しんけん」の分析過程で作られた例文「女性との交際にはしんけんだ」の、映像化ストラ

テジーによる例文分析の例である(坂口 2009)。

[例] まじめでまっすぐなイメージ

[例] 今いる、その相手に対してまじめに向き合っていて他を見ていない

3. 研究の方法

ストラテジートレーニング : 長野県内の日本語学校による「日本語教師養成コース」の一科目「類義表現・誤用分析」において、本研究(坂口)が類義語分析ストラテジーのトレーニングを実施した。15名の受講者(男性5名・女性10名)は非教師の日本語母語話者で、教育実習での類義表現分析の経験があるが分析方法の指導は受けていない。

トレーニングの手続き : 例文作成・例文分析・言語特徴分析の順で、類義語分析行動を支えるストラテジーの解説と練習を行った。ストラテジーの解説資料と練習用ワークシートで構成されるトレーニング教材は、情報機器で提示する形式のもの(坂口 2009、坂口・河野 2010)から、紙媒体で提示する形式に作成し直した。**練習の流れ** : 映像化ストラテジーについては、解説の後に練習を行った。①と②が個人で、③と④がグループで、ワークシートに書き込みつつ段階的に進められる。

①類義語ペア(わがまま／かって)それぞれに五文ずつ例文を作成

②類義語の特徴を示唆すると思う例文を類義

語ごとに二文ずつ選択

- ③同基準で②からさらに例文を二文ずつ選択
 ④例文からの映像やイメージを検討し言語化
データ:映像化ストラテジーの練習でワークシートに受講者が書き込んだ例文とその分析内容をデータとし、例文分析行動を観察する。

4. 調査結果と考察

4.1 例文場面の俯瞰的な説明

例文から想起した映像について、例文話者の行為や行動に着目し全体的に説明している。例文が示す内容には具体的に触れず、引いたカメラからの俯瞰的説明である。例1は人物評価を示す例文を、話者の行為として説明している。例2は日本語教育経験のある講座補助者を含むグループの例文分析だが、例文が示す否定的依頼の内容ではなく、例文中の登場人物の行為に焦点を当てて表面的に説明している。両例とも例文が直接的に示す内容が説明されていない点が特徴的である。

〔例1〕「末っ子は長女に比べればわがままだ
 と思うよ」 (受講者グループB)

【例文分析】末っ子の性格を批評している

〔例2〕「子どもじゃないんだから、そんなわ
 がまま言わないで」(受講者グループE)

【例文分析】小さな子ども(高校生)以上
 に向かって、大人(女性)がなだめて
 いる

4.2 類義語の意味特徴が反映された説明

俯瞰的な例文分析に、類義語の意味特徴を示唆する情報が含まれる場合がある。例3は例文の言表事態の表面的説明だが、「自分の欲求に従っている様子」という説明には「わがまま」の意味特徴が反映されている。例4は、例文にない情報を補いつつ、例文話者の様子を説明している。例文が直接的に示す聞き手への命令ではなく、当該例文を引き起こした事態と心情の説明である。特に「断りなく使われて」という説明は「かって」の意味特徴が反映されている。

〔例3〕「わがままなことを言うてはいけません」
 (受講者グループA)

【例文分析】自分の欲望に従っている様子を叱られている

〔例4〕「勝手に他人の物を使わないこと」
 (受講者グループC)

【例文分析】大事に使っているものを断りなく使われて怒った

4.3 周辺的な事象の説明

例文には直接的に示されていない周辺的事象や、例文が示す事態の前後文脈を説明する例文分析である。例5は例文の情景描写で、例文

が直接的に示す内容ではなく、その前後に起こる事態や例文話者の心情を述べている。例6は聞き手視点からの俯瞰的な例文分析で、禁止を示す例文の直接的な内容とはいえない。「机を開けようとして」という部分は例文に示されていない、当該例文に先立ち例文発話を引き起こした行為である。例文の直接的な内容とは異なるが、「本人の了解なく」という説明には文中における類義語の働きが関わっており、「かって」の意味特徴に関わっている。

〔例5〕「風も吹かないのに、ドアが勝手にしまった」
 (受講者グループE)

【例文分析】パタン、あれ? それが起こってから気づき、不思議に思う

〔例6〕「他人の机を勝手に開けてはいけません」
 (受講者グループA)

【例文分析】本人の了解なく机を開けようとしてとめられた

4.4 映像化ストラテジー使用の留意点

映像化ストラテジーによる例文分析は、想起する映像から例文の言表事態を具体的に把握しようとする。しかし、例文が表す事態や事象が表面的、表層的にしか説明されない場合や、例文に直接的には示されない周辺的事象が想起、連想される場合がある。結果的に、例文の直接的な言表事態の不明瞭のまま、類義語の特徴を示唆する情報が含まれず、特徴発見に直結しにくいノイズのような情報が入り込み、類義語分析での例文利用を困難にする。

例文から情報を多く引き出しつつ類義語分析に資する情報を効率的に得るには、映像化ストラテジーで想起し言語化した例文内容の精査が必要となる。言語化した映像内から、類義語の働きや特徴が窺える事象を探して焦点化し、踏み込んで例文内容を具体化する作業が重要となる。映像化ストラテジーを用いて例文から有用な情報を的確に得られるようにするには、以上の点を意識化することが求められる。

参考文献

- 坂口和寛(2009)「日本語教師の日本語分析技術を総合的に養成する独習型日本語分析ストラテジートレーニング教材の開発」水谷修監修『日本語教育の過去・現在・未来 第5巻 文法』, 凡人社, pp.153-178
 坂口和寛・河野俊之(2010)「日本語分析ストラテジーの独習型教材において疑似的インターアクションを生み出すインストラクション」『日本語教育方法研究会誌』, vol.17, No.1, pp.98-99
 付記:本研究の一部は、平成23年度科学研究費助成事業[基盤C;課題番号23520624;研究代表者・坂口和寛]の助成を受けたものである。